

和歌山の匂い

ランガ ジュノ アジ クレスワント
日本語・日本文化研修留学生 インドネシア

和歌山に来てから八ヶ月が経った。新しい友人たちの優しさ、先生方のご指導、そして来日当初に親身に支えてくださった WIN Concord の皆さんの温かさのおかげで、生活にはすっかり慣れた。しかし、心のどこかでは「ここは一時的な場所にすぎない」と感じていた。もちろん、有名な観光地にも足を運んだ。荘厳な那智の滝を背にした熊野古道、神聖な高野山、美しい白浜の海岸。そのどれもが、確かに息をのむほど美しかった。でも、それはあくまで「旅先の美しさ」であり、私の心の奥に何かを残すものではなかった。私は思っていた。「私はここに住んでいるけれど、この町との間にまだどこか距離を感じる」と。

そんなある冬の日、友人に誘われて、ネパール料理のレストランで昼食をとることになった。冬の暖かい日差しに騙され、私は寒さを軽く見てしまい、うっかりコートを持たずに出かけてしまった。だが、予定はとてもシンプルで、食事をして、そのまま帰宅するつもりだった。レストランに着き、食べたチキンカレーとナンは想像以上に美味しく、冷えた体がじんわりと温まっていくのを感じた。お腹も心も満たされて、「今日はこれで十分だ」と思った。

レストランを出た後、友人の一人が「雑賀崎灯台に行こう」と言い出した。突然の提案に驚きつつも、私はまだその場所に行ったことがなかったので、興味が勝った。私たちはバスに乗って雑賀崎へ向かった。

その時すでに午後三時を回っていて、空気は次第に冷たさを増し、海から吹く風が肌に刺さるようだった。バス停から灯台までの道を歩きながら、私はコートを忘れたことを心の中で何度も後悔した。風は容赦なく私の体温を奪い、思わず足を止めたくなるほどだった。しかし、そのすべての寒さや後悔は、灯台の上に立った瞬間、すべて消えてしまった。目の前に広がるのは、果てしなく続く青い海と、小さな島々が点在する静かな景色。夕陽に照らされた水面がきらきらと輝き、その風景は、言葉にできないほど美しいものだった。

その後、友人が「港の方も見に行こう」と提案し、私たちは丘を下って、住宅街の細い路地を抜けながら港を目指した。日が傾き始め、漁船が静かに並ぶその光景に、時間がゆっくりと流れているような錯覚を覚えた。穏やかな海風と夕暮れの柔らかな光が、心を落ち着かせてくれた。

帰り道もまた、同じように路地を歩いてバス停へ向かった。空はもうすっかり夕闇に包まれていた。三人で静かに歩いていたそのとき、ふと、どこかの家から夕飯の匂いがふわ



りと漂ってきた。それは、海の近くならではの、香ばしく揚げた魚やエビのような匂いだった。

その瞬間、胸の奥がじんわりと温かくなった。その匂いは、ただの食事の匂いではなかった。寒さの中で感じたその匂いは、まるで誰かがそっと差し出してくれた毛布のように、私の心をやさしく包んだ。寒さに凍える身体と心の硬さ、そして帰り道の疲れまでもが、



その匂いとともにそっと溶けていくようだった。まるでその匂いが、その日の旅からの帰宅を優しく迎えてくれるかのように感じられた。そして気づいたのだ。これは「家の匂い」だと。それは、和歌山のこの地で初めて感じた「帰る場所」の匂いだった。心の中でそっとつぶやいた。「ただいま」と。

私を深く感動させたのは、高野山でも、歴史ある熊野古道でもなかった。和歌山の本当の美しさは、壮大な観光地ではなく、日々の暮らしの中の何気ない一瞬に隠れていたのだ。それは、雑賀崎の帰り道、細い路地の中でふいに漂ってきた家庭料理の匂い。その匂いこそが、私にとっての「和歌山の匂い」であり、同時に「家の匂い」になったのだ。

あの日以来、私は日本で暮らす中で、住宅街を歩いている時や、友人と出かけた先で、料理の匂いを感じるたびに、ふとあの瞬間を思い出す。あの雑賀崎の路地へと戻り、温かい匂いに包まれるのだ。そして、そのたびに心の中でそっと和歌山を思うのだ—今の私にとっての「帰る場所」は、ここなのだと。

Aroma Wakayama

Rangga Juno Aji Kreswanto

Mahasiswa Studi Bahasa dan Budaya Jepang Indonesia

Delapan bulan telah berlalu sejak saya menginjakkan kaki di Wakayama. Sepanjang waktu itu, saya telah mengagumi keindahan alam dan sejarahnya—menyusuri Kumano Kodo yang sunyi, merenung di Koya-san, dan menikmati angin pantai Shirahama. Kehidupan perlahan menyatu dalam ritme damai kota ini, dan dukungan dari para sensei, teman-teman, serta keluarga WIN Concord membuat saya merasa diterima sepenuh hati. Wakayama pun bukan lagi sekadar tempat asing; ia telah menjadi bagian dari hidup saya.

Namun, momen yang paling mengubah hati saya justru datang dari hal yang paling sederhana. Di suatu hari musim dingin, setelah makan siang di restoran Nepal bersama teman, kami memutuskan secara spontan untuk pergi ke Mercusuar Saikazaki. Meski tanpa mantel dan kedinginan selama perjalanan, saya dibuat takjub oleh panorama laut lepas yang disinari mentari sore. Keindahannya seolah menghapus rasa dingin dan lelah saya.

Perjalanan berlanjut ke pelabuhan kecil yang tenang, melewati gang-gang sempit di tengah perumahan. Saat senja menyelimuti langit dan kami berjalan dalam diam, aroma lembut dari masakan rumahan tiba-tiba tercium dari salah satu rumah. Saat itulah, kehangatan menjalar perlahan ke dalam dada saya. Aroma itu bukan sekadar bau makanan—itu adalah rasa sambutan, rasa tenang, rasa pulang.

Saya menyadari bahwa itulah "aroma rumah", yang untuk pertama kalinya saya rasakan di tanah Jepang. Bukan dari tempat wisata terkenal, melainkan dari gang kecil yang biasa, dari aroma dapur yang sederhana. Sejak saat itu, setiap kali mencium aroma masakan di jalan, saya selalu teringat pada Saikazaki—dan dalam hati saya berbisik, "Tadaima."

Wakayama telah menjadi tempat saya berpulang. Dan aroma itu—aroma Wakayama—akan selalu saya kenang sebagai aroma rumah saya di Jepang.